# 星のない街で

くまのすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
星のない街で

【Ｎコード】
Ｎ５２３９Ｍ

【作者名】
くまのすけ

【あらすじ】
田舎から都会の大学へでてきた私。田舎とはまったく違った環境に戸惑い、不安に感じていた。
でも、都会育ちの博樹と出会って、その気持ちを知らされ、心強くかんじるという話。

今日も遅くなった大学の帰り道、マンションへ向かって私は歩いていた。
「ホント、このあたりって、全然星が見えないわ。ヤになっちゃう！」
空を見上げながら、私、ぶつくさ言う。
「ほら、下も見て歩かないと、つまづくぞ！」
帰る方向が同じ博樹が、心配して後ろから声をかけるけど、そんなの余計なお世話。無視、無視！
「やたらに建物が立て込めてて、せせこましいし、ちょっと大通りに出れば、夜中でも人や車でいっぱいだし。空気も悪いし、ほこりっぽいし・・・・・・」
「はは、そうか？　日本中どこでも、そういうもんじゃねえの？」
「ちがうわよ！　私の田舎だと、ちゃんと夜に空を見上げれば、宝石箱をひっくり返したみたいに星がきらめいているし、夜になれば、ほとんど人や車なんて、通ってないもん！」
「あぁ、そういえば、去年の夏休みに、みんなで坂本先生の実家へ海水浴に行ったとき、夜空きれいだったよなぁ～」
「なに言ってるのよ！　坂本先生の所だって、周りのホテルとかライトアップされてて、星なんて、満足に見れなかったじゃない！」
「そ、そうかぁ？　俺には、あんな星でいっぱいの夜空なんて、初めてだったから、すごく感動したんだけどなぁ？」
私の後ろで、博樹、うっとりとした声を出している。去年の夏休みの夜空を思い出しているのだろうか？
「俺の生まれ育ったところって、２４時間営業のスーパーがあったり、コンビニがあったり、一晩中、あちこちでネオンサインがチカチカしているような場所で、夜中でもバンバン車が走ってるからなぁ。ホント、空にあんなに星があるなんて、全然、知らなかったよ」

「フンだ！　どうせ、あんたは都会育ちで、あたしは、田舎者よ！　２４時間営業のスーパーなんてなかったし、３キロ離れた村一軒のコンビニだって、１１時には閉まっちゃうんだから！　家の周りは、田んぼだらけで、毎晩ゲコゲコかえるが合唱して、夜も眠れやしない！」

振り返って、アッカンベーして、駆けてく。

「おい、待てよ！　足元暗いから走ると危ないぞ」

あわてて、博樹、追いかけてくる。

なんだか、ちょっと楽しい気分。

でも、途端に、なにか踏んづけた。そして、滑った。

一瞬、宙に浮いた私の体をしっかりと受け止めのは、もちろん、追いついた博樹。

「ほら、言わんこっちゃない！」

「ご、ごめん」

「夜空が明るいって言っても、足元、結構あちこちに暗い場所があるんだから、注意しないと」

「う、うん・・・・・」

博樹、目の前でしゃがんで、私が踏んづけて転げそうになったものをつまんで持ち上げた。スナック菓子の袋だった。

「ったく！　だれだよ、こんなもの捨てたの！　危ないってぇの！」

そう言いながら、近くのゴミ箱に捨ててくる。

私の田舎で、夜道といったら、本当に真っ暗。見えるものといったら、月や星の明かり以外なにもない。

なにかの事情で、夜、出歩くことになったら、本当に、本当に、怖かった。恐ろしかった。

でも、大学に入って、この街で一人暮らしを始めたら、夜がすごく明るいし、街のあちこちに街灯が設置されている。

でも、やっぱり夜一人で出歩くのって、私、苦手。

街が明るくて、歩きやすいけど、その分、人や車が多い。夜、一

人で歩いていて、向こうからだれか他の人が歩いてくると、すごくすごく緊張しちゃう。
私の田舎なら、夜道で人に出会うなんて、考えられないことなんだし。
だから、実験で遅くなった大学の帰り、一人になると、とても心細かった。
いつも、一緒に帰ってくれる人がほしかった。
今日はたまたまゼミが同じ博樹と一緒だけど、他の友達を含めて、いつもいつもだれかと一緒に帰れるってわけじゃない。
今、心の底から、星にお願いしたかった。いつも一緒に帰ってくれる人を私に与えてって。
でも、この街では星は見えない。

「なあ、星って見えないけど、別にないわけじゃないんだよな」
博樹、並んで歩きながら、そんなことをつぶやいた。
「うん、そうだよ。あの光の洪水の向こうに、ちゃんと星があるんだよ」
「ああ、知ってる。なんか、不思議だよなぁ。見えないのに、ちゃんとそこにあるって」
そう、ポツリポツリ話す顔に街灯の光が当たっている。心臓がトクンと打った。
「博樹って・・・・・・　ううん、なんでもない」
「ん？　なんだよ、『博樹って』の後は？　気になるだろ！」
向き直った博樹と眼が合って、思わずうつむいちゃう。
「うん。博樹って、意外とロマンチストだったんだなぁって・・・・・・」
「バカ！」
頭を小突かれた。
「痛いなぁ。もう！」

「なあ。正直なことというと、俺、今日、大学にいててもすることなかったんだ」
「え？」
「もう卒論のデータ、集め終わったし、必要な実験は全部済ませたし」
　ええっと、じゃ、博樹はなんでこんなに遅い時間まで大学にいたのだろう？
「お前がまだ実験してたからさ。一緒に帰ろうと思って、ずっと待ってた」
「・・・・・・」
「あのさ。お前の方、結構大変そうだから、実験手伝ってやろうか？」
　博樹、なんでもないっていう素振りでポツリとつぶやいた。
「あ、ありがとう・・・・・・　でも、どうして？」
　街灯の下で立ち止まった博樹、一瞬眼が泳いだ後、私を見た。そして、自分の胸をひとつ叩いた。
「俺のここにも、見えないけど、確かに存在するものがあるからな」
　ジッと私を見つめ続ける。私も、その眼を見返したまま。
　――えっ？
　しだいに、頬が熱くなっていくのを感じた。
　とうとう、耐え切れなくなって、二人して視線をそらした。

　さっきから、私たち、二人並んで、歩いていた。
　二人とも黙りこくったまま。
　お互いの息遣いだけが聞こえる。
　私、うれしかった。幸せだった。でも、それでも、さっきからモヤモヤしたものが胸の中にある。
　だから、思い切って、声に出してみた。
「ねぇ。あたし、ううん、女の子って、見えないものとか、触れないものって、あんまり好きじゃないかも」

「・・・・・・」
「だから、ちゃんと触れ合えるように、形にしてほしいな」
博樹、一瞬、戸惑った様子だけど、すぐに私が何を言いたかったか分かったみたい。途端に、ニヤリとした。
「この欲張りめ！」
笑顔で返事の代わり。
博樹、軽くため息をついて。
「いいか、男なら一生で、そんなには言わない言葉だから、聞き漏らさないように、よーく聴いておけ！」
博樹、私の眼を見て、私にだけ聞こえる声でささやいた。
「俺は、お前が好きだ」
とてもうれしかった。幸せだった。でも、私って博樹が言うように欲張り。ううん、女の子って、みんな欲張りなもの。もっともっと聴きたい。
「ねぇ？　よく聞こえなかったわよ。もう一回言って♪」
さらに大きなため息。それから、博樹、大きく息を吸い込んだ。ぎゅっと眼をつむり、そして、
「俺は、お前が好きだ！！」
町中に響き渡るような大きな声。近くの家の中で犬がキャンキャン鳴きだした。
耳がキーンとなって、痛い。でも、幸せ。

今晩も大学は帰りが遅くなる。
でも、もう夜道は怖くない。
だって、今日も実験を手伝ってくれている博樹と一緒に帰るから。
今日も、見えないけど、確かにそこにある星に、ありがとうってつぶやいた。

**（後書き）**

もともとブログ（『恋とか、愛とか、その他もろもろ・・・・・・』ｈｔｔｐ：／／ｌｏｖｅｅｔｃ．ｓｅｅｓａａ．ｎｅｔ／）の方で掲載していた話だけど、結構、気に入ったので、こちらにも転載です。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5239m/

星のない街で

2010年10月8日14時20分発行